

〈原著論文〉

## 新潟県立柏崎高等女学校における卒業生の進路

鳥田直哉\*

### はじめに

本稿では、新潟県立柏崎高等女学校（以下、「柏崎高女」とする）を対象に、同校の『同窓会々報』などから、卒業生がどのような進路をたどったのか、その一端を明らかにする。

現在の柏崎市の人口は8万人足らずであるが<sup>1)</sup>、近代における同市（昭和15年まで柏崎町）は、昭和10年の国勢調査によると人口10万人を擁していた<sup>2)</sup>。明治20年代に西山油田が開発され<sup>3)</sup>、その後、明治中期から昭和のはじめにかけて製油業が発展した<sup>4)</sup>。明治30年には北越鉄道柏崎駅が開業し<sup>5)</sup>、日本石油柏崎製油所をはじめ多数の石油会社が設立された。さらに、昭和7年には理研の柏崎工場など理研コンツェルン傘下の工場群が建設され<sup>6)</sup>、近代工業都市として発展した。

高等女学校に関する研究をみると、深谷昌志『良妻賢母主義の教育』<sup>7)</sup>をはじめ、近代女子教育の原理として「良妻賢母」が存在し、男子の中等教育とは異なる点が強調されてきた。土田陽子は、「ジェンダー秩序」形成に高等女学校が果たした役割を明らかにした。そして、「公立名門高等女学校」の一つとして県立和歌山高等女学校をとりあげ、その「利用層」や「学校イメージ」「学校文化」「ジェンダー規範の特徴」を明らかにした。これまでの研究は、高等女学校が「良妻賢母」養成の機関であり、「女子はその学歴エリート養成ルートから排除されていた」<sup>8)</sup>という視点で語られることが多かった。しかし、土田の対象とした県立和歌山高等女学校の卒業生（昭和4～22年卒業）についてみると、7割の者が何らかの学校に進学しており<sup>9)</sup>、「良妻賢母」養成とは様相を異にしたことが分かる。旧制中学校とは異なる機能を期待されたが、中等教育機関の、『学卒後』の教育・学習の実態<sup>10)</sup>について、個別に検証することには意義があろう。

土田の言う「地域の都市化・近代化が進展する大正期以降の高等女学校に焦点を当てた事例研究」<sup>11)</sup>の一つとして柏崎高女の卒業後の進路を取り上げる。先に述べた柏崎の都市化・近代化と柏崎高女とがどのように関わったのかについても言及できればと考える。

## 1. 県立高等女学校の設置

### (1) 初の設置

『新潟県教育百年史』<sup>12)</sup>、新潟県立柏崎常盤高等学校編『創立六十周年記念誌』<sup>13)</sup>などから、新潟県内の高等女学校設置についてふれておく<sup>14)</sup>。

明治32年2月7日に「高等女学校令」が出され、「北海道及府県ニ於テハ高等女学校ヲ設置スヘシ」（第2条）と、北海道および各府県に高等女学校の設置義務が課された。『新潟県教育百年史 大昭和前期編』によると、新潟県においては、同年11月の通常県議会で高等女学校設置が提案されたが、時期尚早であるとして否決された、とされている<sup>15)</sup>。その背景としては、水害や虫害による県財政の逼迫、女子教育が「贅沢」であるとの世論、女子中等教育に対する県民の関心が低かったことなどが指摘されている。県会で否決されたが、訓令により明治33年度の開校を迫られており、県は内務大臣に稟議して開校にこじつけた。明治33年2月23日、文部省告示第38号により、新潟市に新潟県高等女学校（翌年に「新

\* 東海学園大学教育学部教授

潟県立高等女学校」と改称、以下「新潟高女」とする)を設置することが認可された<sup>16)</sup>。そして、明治33年3月、新潟県令第23号をもって「新潟県高等女学校規則」が定められた<sup>17)</sup>。

## (2) 四つの郡立高等女学校

県立新潟高女に続き、明治33年から明治36年にかけて、郡立高等女学校4校が相次いで設置された<sup>18)</sup>。明治33年5月7日には、「寺町善導寺」を仮校舎として中頸城郡立高田高等女学校が開校した。さらに、明治35年には北蒲原郡立新発田高等女学校、古志郡立長岡高等女学校、そして明治36年に刈羽郡立高等女学校が設置認可された。明治40年にこれら4校は県立に変更され、刈羽郡立高等女学校は新潟県立柏崎高等女学校(以下、「柏崎高女」とする)に改称した<sup>19)</sup>。

柏崎高女の設置経緯について、『新潟県教育百年史 明治編』を参照してもう少し詳しく述べておく。柏崎高女の源流は、帝国婦人協会の北越支会が明治32年9月4日に柏崎の妙行寺で主催した「婦人修徳会」であった。この時、下田歌子の講演が行われたとある。女子教育の重要性を感じた北越支会の「近藤泰子、片桐妙源尼」が女学校設立運動を展開し、北越女学校を開校した。同書には、「下田女史の精神を掲げて教育が行なわれた」<sup>20)</sup>と記述されている。しかし、女子教育に対する住民の理解のなさに加え、「資金集めも苦しかった」こと、「石油株の変動も大きく影響した」<sup>21)</sup>こと等により、継続することは困難であった。そこで、先の「近藤」らは北越女学校を母体として郡立高等女学校設置を訴え、明治36年3月29日、刈羽郡立高等女学校、後の柏崎高女が設立された。

柏崎高女を含め、郡立4校を県立に移管する動きがあった。明治40年度から新潟高女に加え、高田、長岡、新発田、柏崎の4校が県立高女となった。明治32年12月11日の県会速記録によると、当時の勝間田稔知事には「新潟市ニ一ツ、ソレカラ、高田、長岡、新発田、此四ヶ所ニ先ツ女学校ヲ設ケルト云フノハ極メテ必要」、「此四ツノ学校ガアレバ先ツ十分デアラウ」<sup>22)</sup>という考えがあったようである。

高田、長岡、新発田については、明治40年度から、勝間田知事の述べた通り県立移管が実現した<sup>23)</sup>。柏崎高女が県立となった理由として、柏崎常盤高等学校の『六十周年記念誌』には、次の様に記してある。

(前略) 当時本県の県立高女校は、新潟、長岡、高田、新発田に本校を加えたものだけであつた。他の地区はそれぞれ我国五港の一とか、城下町とかとしてその基盤があつたが、わが柏崎だけが政治的にも経済的にもこれはという特別大きな背景がなかつたにも拘らず、本県最初の県立高女五校の一に加わり得たことは近藤、山田女史らの努力による北越女学校の創設が大きく影響したと見るべきであろう。<sup>24)</sup>

これらの記述によると、帝国婦人協会の北越支会になる「婦人修徳会」とその後継の北越女学校の存在、下田歌子の柏崎への来訪がこの地に女子教育の重要性を根付かせる契機になったとされている。県の政策から独立した系譜で設置された、とみることもできよう。

## 2. 『新潟県統計書』、同窓会報から分かる卒業生の進路

### (1) 『新潟県統計書』にみる進路

【図表1】【図表2】は『新潟県統計書』に掲載されている「前年度本科及実科卒業生ノ本年度内三月一日ノ状況」<sup>25)</sup>である。同書により、新潟県内における高等女学校卒業生の進路を把握できる。県立5校に限って、大正11年から昭和14年までを集計した。年度により集計方法に違いがあるので、【図表1】では、経年変化を捉えられるよう筆者が読み替えた。【図表2】では、【図表1】で「専門学校等」として集約した数字を学校別に示した。

【図表1】『新潟県統計書』にみる県立高等女学校卒業者の進路

学校名	西暦	実業従事、 官吏・公吏	専門 学校等	女高 師	師範 一部	高等 科	裁縫・ 職業 学校	その 他学校	家 庭	不 詳・ 死 亡	計	学校名	西暦	実業従事、 官吏・公吏	専門 学校等	女高 師	師範 一部	高等 科	裁縫・ 職業 学校	その 他学校	家 庭	不 詳・ 死 亡	計		
																								学校名	西暦
新潟	1922	33	5	3	—	22	2	0	72	0	137	柏崎	1922	8	1	0	—	1	0	1	0	34	45		
	1923	43	5	3	—	18	1	0	71	0	141		1923	11	8	1	—	0	1	4	66	1	92		
	1924	11	8	3	—	30	1	15	124	1	193		1924	8	2	0	—	0	0	3	37	0	50		
	1925	40	5	1	—	36	0	9	128	3	222		1925	9	4	0	—	0	2	2	70	3	90		
	1926	44	5	1	—	48	0	7	159	0	264		1926	13	3	1	—	1	4	4	111	0	137		
	1927	95	10	1	—	29	0	8	125	2	270		1927	11	6	0	—	0	2	5	100	0	124		
	1929	51	13	1	—	32	1	46	152	4	300		1929	1	3	0	—	0	0	15	110	2	131		
	1930	43	9	5	—	19	14	22	173	0	285		1930	2	4	0	—	1	5	9	106	0	127		
	1933	17	14	0	—	30	0	20	180	1	262		1933	6	1	0	—	0	0	6	120	0	133		
	1934	41	7	0	2	29	6	9	161	1	256		1934	21	1	0	2	0	0	14	82	1	121		
	1935	63	5	0	2	26	2	38	139	2	277		1935	11	5	0	5	0	0	4	97	0	122		
	1937	97	2	1	7	26	0	45	117	0	295		1937	14	1	0	3	2	0	10	103	0	133		
	1938	46	1	2	5	32	0	18	178	0	282		1938	21	0	0	2	2	0	6	114	0	145		
	1939	32	0	0	0	0	0	0	2	0	34		1939	11	0	0	6	0	0	5	125	0	147		
	通算	656	89	21	16	377	27	237	1,781	14	3,218		通算	147	39	2	18	7	14	88	1241	41	1,597		
	新発田	1922	19	2	1	—	1	0	0	22	0		45	高田	1922	88	3	3	—	2	0	1	0	0	97
		1923	25	5	1	—	0	1	1	52	1		86		1923	10	4	2	—	2	2	1	117	1	139
		1924	4	0	2	—	3	0	2	35	0		46		1924	89	5	0	—	2	0	1	0	0	97
		1925	13	4	2	—	4	5	1	56	0		85		1925	122	9	2	—	0	3	4	1	0	141
1926		33	2	0	—	1	2	2	98	0	138	1926	214		8	1	—	0	1	5	0	1	230		
1927		26	3	1	—	0	9	1	87	0	127	1927	11		2	1	—	0	0	22	198	1	235		
1929		8	2	0	—	1	0	39	97	0	147	1929	1		5	0	—	0	0	20	201	1	228		
1930		7	0	0	—	0	0	19	103	0	129	1930	0		7	0	—	0	27	14	175	0	223		
1933		0	2	1	—	1	0	5	118	0	127	1933	2		2	0	—	0	0	10	204	0	218		
1934		0	2	0	0	0	0	9	116	0	127	1934	12		0	0	5	0	8	51	138	0	214		
1935		1	2	0	4	2	0	6	99	1	115	1935	8		3	0	4	0	1	41	130	0	187		
1937		0	0	0	4	0	0	45	76	1	126	1937	31		0	0	1	0	0	51	114	0	197		
1938		0	0	0	7	0	0	39	108	0	154	1938	23		4	0	5	0	0	42	118	0	192		
1939		18	0	0	2	0	0	35	88	0	143	1939	44		4	0	0	0	0	26	137	3	214		
通算		154	24	8	17	13	17	204	1,155	3	1,595	通算	655		56	9	15	6	42	289	1533	7	2,612		
長岡		1922	15	4	0	—	0	0	1	0	110	130	高田		1922	88	3	3	—	2	0	1	0	0	97
		1923	9	2	0	—	0	1	1	82	0	95			1923	10	4	2	—	2	2	1	117	1	139
		1924	20	3	0	—	0	2	5	111	0	141			1924	89	5	0	—	2	0	1	0	0	97
		1925	25	2	3	—	0	3	1	111	0	145			1925	122	9	2	—	0	3	4	1	0	141
	1926	37	11	0	—	1	3	7	177	1	237	1926		214	8	1	—	0	1	5	0	1	230		
	1927	26	1	4	—	0	0	21	178	2	232	1927		11	2	1	—	0	0	22	198	1	235		
	1929	0	1	0	—	0	0	30	191	4	226	1929		1	5	0	—	0	0	20	201	1	228		
	1930	0	8	0	—	0	0	14	211	0	233	1930		0	7	0	—	0	27	14	175	0	223		
	1933	0	1	0	—	2	0	28	194	0	225	1933		2	2	0	—	0	0	10	204	0	218		
	1934	7	1	2	4	1	0	22	182	0	219	1934		12	0	0	5	0	8	51	138	0	214		
	1935	10	1	1	3	0	0	14	172	0	201	1935		8	3	0	4	0	1	41	130	0	187		
	1937	42	0	0	6	0	0	54	136	0	238	1937		31	0	0	1	0	0	51	114	0	197		
	1938	82	0	1	0	3	0	27	135	0	248	1938		23	4	0	5	0	0	42	118	0	192		
	1939	65	0	1	0	0	0	37	141	0	244	1939		44	4	0	0	0	0	26	137	3	214		
	通算	338	35	12	13	7	9	262	2021	117	2,814	通算		655	56	9	15	6	42	289	1533	7	2,612		

〔各年度の新潟県編『新潟県統計書』(大正13～昭和16年)を基に作成。【図表2】も同じ。〕

※各年度の「本科実科前年度卒業者ノ本年度末ノ状況」などの数字を用いた。  
 ※『新潟県統計書』は年度により表記に違いがあるので次の様に読み替えた。「実業従事者」「学校職員」「官吏公吏等」を本表では「実業従事、官吏公吏」として示した。また、「女子大学生徒」、「医学専門学校生徒」(昭和10年度まで)、「歯科医学専門学校生徒」(昭和10年度まで)、「美術学校生徒」(昭和10年度まで)、「女子英学塾生徒」(昭和9年度まで)、「実践女学校生徒」(昭和10年度まで)を「専門学校等」として合算した。「女子高等師範学校生徒」はそのま「女高師」として示した。「女子師範学校二部生徒」は昭和9年度から示されており、本表では「師範二部」として示した。「高等女学校高等科生徒」は「高等科」と、「裁縫及職業学校生徒」は「裁縫・職業学校」と、「其ノ他学校生徒」は「その他学校」、「家庭」はそのま「家庭」と示した。

【図表2】『新潟県統計書』にみる高等女学校卒業者の進学先

進学先	学校名	西暦											総計	進学先	学校名	西暦											総計						
		1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1930	1933	1934	1935				1937	1938	1939	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929		1930	1933	1934	1935	1937	1938
「女子大学生徒」	新潟	2	2	6	3	2	7	6	4	8	1	4	2	1	0	48	新潟	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3	1	1	1	6	
	新発田	1	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	5	新発田	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	長岡	2	1	0	0	4	1	1	0	1	1	1	0	0	0	12	長岡	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	柏崎	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	4	柏崎	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	高田	1	3	2	1	0	2	2	0	2	0	3	0	4	4	24	高田	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	6	8	8	5	6	13	9	4	11	3	8	3	5	4	93	計	1	1	0	1	3	0	0	1	1	3	1	1	1	1	1	12	
「医学専門学校生徒」	新潟	2	2	2	1	0	3	5	2	1	0	0	0	0	18	新潟	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
	新発田	0	0	0	2	1	0	0	0	2	2	2	0	0	9	新発田	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	長岡	1	0	2	2	1	0	0	8	0	0	0	0	0	14	長岡	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	柏崎	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	2	0	0	5	柏崎	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	高田	0	0	0	0	3	0	0	7	0	0	0	0	0	10	高田	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
計	3	2	5	5	5	3	6	18	3	2	4	0	0	56	計	1	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5		
「実践女学校生徒」	新潟	0	0	0	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	4	新潟	1	1	0	0	0	0	0	2	3	2	0	0	0	0	0	9	
	新発田	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	新発田	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
	長岡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	長岡	1	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	
	柏崎	0	1	0	2	1	0	1	0	0	0	1	0	0	6	柏崎	1	3	1	1	2	5	1	2	1	0	2	0	0	0	0	19	
	高田	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	高田	1	1	0	5	4	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	14	
計	0	4	3	3	4	0	1	0	1	0	1	0	0	17	計	4	7	1	6	10	5	4	4	4	2	2	0	0	0	0	49		
「美術学校生徒」	新潟	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	新潟	0	0															

【図表 1】に示した通算の数から、卒業生数に占める各進路の比率を考えてみる。新潟高女においては専門学校等や高等科へ進む者の比率が他校に比べ高い。また、就職者の比率も高田高女について高く、相対的に家庭にある者の比率は低い。柏崎高女の進路をみると、専門学校等へ進んだ者の比率は新潟高女について高く、師範二部の比率が高いことも特徴的である。しかし、就職者の比率は低く、相対的に家庭にある者の比率が最も高くなっている。

『新潟県教育百年史 昭和前期編』には、大正・昭和期の「進路指導」について、以下の様に記述されている。

卒業予定者に対する指導について、具体的に配慮するところがあった。とくに上級学校志願者に対しては、どの学校でも大正末から放課後あるいは休暇に全課制度を設けて、国語・数学・英語の三科目を中心に準備教育を施すことが行なわれた。柏崎高女のように小学校教員検定試験希望者も含めて指導した学校もあった。また就職希望者に対しては、珠算や時に邦文タイプの指導を行ない、さらに四年生になると地域の工場・郵便局・銀行・幼稚園・裁判所などを見学させて社会的見聞を広めるとともに、修学旅行の際にはとくに実社会における婦人の職業的活動の状況について参考資料を得させることに努めた。

なお、新潟高女における志望別組編成の実施は注目される。これは以上のような卒業後の志望の多様性にこたえて昭和十年度から始められたものである。本科三、四年各五組のうち二組を上級学校入学志望者をもって組織して受験組と名づけ、他の三組を家庭に入る者、就職希望の者をもって組編成するというものであった。<sup>26)</sup>

「職業婦人」の増加とともに、高等女学校においても上級学校進学希望者に対する指導がなされた。特に新潟高女は、「進学校」として期待されていたことが分かる。柏崎高女では小学校教員検定受験に特化した指導もなされたようである。また、会社や公的機関への就職に向けて、そのモチベーションを高める活動が行われた。

新潟高女においては、1～2割の生徒が高等科へ進んでいたこと、「家庭」にある者の比率がこの5校の中で最も低いことなどが分かる。新潟高女においては、大正11年4月に3年制の課程として高等科が設置された<sup>27)</sup>。なお、新潟高女の高等科は、昭和18年4月に廃止され、新たに、修業年限3年の家事専攻科が設置された<sup>28)</sup>。この専攻科の卒業生に対して、中等学校家事科教員、青年学校教員、国民学校訓導の資格が与えられた<sup>29)</sup>。

【図表 2】から、新潟高女においては、「女子大学生徒」が通算して48名と最も多く、柏崎高女においては「実践女学校」生徒が毎年度一定数あり、この5校の中で最も多いことが分かる。先に述べた、下田歌子との縁の深さを示しているものと考えられる。

## (2) 同窓会報等の集計

【図表 3】は、昭和18年柏崎高女同窓会発行の『創立40周年記念号 増改築竣工』にまとめられている、明治39年第1回卒業生から昭和18年第38回卒業生の「卒業生ノ状況」<sup>30)</sup>である。【図表 3】の通り、本表の冒頭には「各学校欄ノ算用数字ハ現在在学中ノ数ニシテ日本数字ハ卒業数ナリ」<sup>31)</sup>とある。本稿では、「算用数字」の部分は斜体に、「日本数字」の部分は算用数字にしてある。

【図表 3】から、柏崎高女卒業生の進路について次の点を指摘できる。進学・その他の学修についてであるが、まず、最も多かったのは女子師範学校第二部へ進んだ者であったという点である。通算して126名、3,380名のうちの3.7%であった。ほぼ同数であるのが、専門学校等へ進んだ者（「音楽学校」「美術専門学校」「女子大学」「実践女学校」「女子医学ニ関スル学校」「体操ニ関スル学校」「京都同志社大

【図表3】新潟県立柏崎高等女学校の「卒業生ノ状況」(明治39-昭和18)

卒業年月		卒業生ノ状況 (各学校欄ノ算用数字ハ現ニ在学中ノ数ニシテ日本数字ハ卒業数ナリ)																			
卒業回数	卒業人員	本校専攻科ニ入リシモノ	本校補習科ニ入リシモノ	女子高等師範学校	女子師範学校二部	音楽学校	美術専門学校	女子大学	実践女学校	裁縫家事ニ関スル学校	女子医学ニ関スル学校	高等女学校高等専攻科	体操ニ関スル学校	京都同志社大学女子部	其ノ他ノ女子専門学校	小学校教員	中等学校教員	実業従事	家庭	死亡	
明治39年3月	第1回	38	0	21	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	8	6
明治40年3月	第2回	15	0	5	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	8
明治41年3月	第3回	30	0	6	1	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	9
明治42年3月	第4回	38	0	7	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	20	11
明治43年3月	第5回	51	0	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26	11
明治44年3月	第6回	40	0	5	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	28	9
明治45年3月	第7回	31	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	8
大正2年3月	第8回	39	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32	6
大正3年3月	第9回	32	0	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26	4
大正4年3月	第10回	39	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	1	0	27	7
大正5年3月	第11回	34	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	28	6
大正6年3月	第12回	42	0	0	1	6	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	27	6
大正7年3月	第13回	50	0	0	0	6	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	5	1	0	28	9
大正8年3月	第14回	44	0	0	1	3	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	3	0	0	30	4
大正9年3月	第15回	46	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1	1	0	0	0	5	0	0	27	11
大正10年3月	第16回	86	0	0	2	0	0	0	1	2	1	0	0	0	3	1	2	0	0	64	16
大正11年3月	第17回	46	0	0	0	5	0	0	0	1	1	0	1	1	0	0	5	1	0	28	3
大正12年3月	第18回	91	0	0	1	0	1	3	1	3	1	1	0	1	1	2	9	2	0	52	12
大正13年3月	第19回	50	0	0	2	3	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1	2	1	1	31	8
大正14年3月	第20回	90	0	0	0	6	0	0	1	0	1	2	0	0	0	1	4	1	0	63	12
大正15年3月	第21回	138	0	0	1	7	0	0	0	1	3	0	0	1	1	1	12	1	3	102	12
昭和2年3月	第22回	124	0	0	0	8	0	1	0	3	1	0	0	2	0	1	13	3	5	82	12
昭和3年3月	第23回	127	0	0	0	5	0	0	0	1	0	1	0	0	0	8	1	3	102	13	
昭和4年3月	第24回	131	0	0	1	7	0	0	0	1	2	1	1	1	0	1	6	1	6	92	19
昭和5年3月	第25回	129	0	0	0	5	0	1	0	2	6	0	2	1	0	0	5	1	2	97	16
昭和6年3月	第26回	135	0	0	0	3	0	0	0	1	5	0	1	0	0	0	4	0	6	111	12
昭和7年3月	第27回	137	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2	4	126	13	
昭和8年3月	第28回	133	0	0	1	1	0	0	0	1	3	0	1	0	0	3	0	1	3	121	8
昭和9年3月	第29回	122	0	0	0	2	0	0	1	0	10	0	1	0	0	2	0	0	5	99	7
昭和10年3月	第30回	122	0	0	0	4	0	0	0	1	9	3	3	0	0	5	1	0	6	89	4
昭和11年3月	第31回	125	0	0	0	1	0	0	1	0	11	0	1	0	0	5	0	0	7	99	3
昭和12年3月	第32回	133	0	0	0	3	0	0	0	0	3	2	1	0	0	6	2	0	0	108	3
昭和13年3月	第33回	145	0	0	1	2	0	0	0	3	12	1	2	0	0	0	1	0	9	123	1
昭和14年3月	第34回	147	0	0	0	6	0	0	0	2	11	0	3	1	0	1	1	0	21	104	2
昭和15年3月	第35回	154	7	0	0	3	0	0	0	4	13	2	0	0	0	2	2	2	10	118	1
昭和16年3月	第36回	146	30	0	0	2	0	1	0	4	2	0	1	0	0	13	0	5	121	2	
昭和17年3月	第37回	149	13	0	0	6	0	1	0	2	3	0	0	1	0	0	11	0	10	108	0
昭和18年3月	第38回	151	12	0	1	11	0	0	1	0	8	2	2	0	0	0	12	0	23	79	0
計		3380	62	49	21	126	3	11	6	29	116	22	20	12	2	34	130	23	129	2448	294

新潟県立柏崎高等女学校同窓会報国団編「創立40周年記念号 増改築竣功」(新潟県立柏崎高等女学校、昭和18年、8-9頁)より。なお、縦書きを横書きに、表頭の「日本数字」は算用数字に、同じく「算用数字ハ現ニ在学中ノ数」は斜体にした。最左欄の「卒業年月」は筆者が付記した。

学女子部」「其ノ他ノ女子専門学校」)であり119名となる(同じく3.5%)。そして、昭和15年3月卒業生から専攻科へ進んだ者があらわれている。『新潟県教育百年史 大昭和前期編』の「第三章 戦時下教育の苦難」には、高等女学校の「専攻科・研究科の設置」について、専攻科や研究科、補習科、家庭寮などは、「将来家庭を営むに必要なまとまった知識や技術を授ける教育機関が欲しいという、同窓会などからの強い要請に応じて母校に付属して設置」<sup>32)</sup>されたと記述されている。そして、「代表的なものとしては新発田(昭和七年)・直江津(九年)(中略)柏崎(十六年)の各高女専攻科、(中略)新潟高女の家庭寮(十一年)など」があり、そのいずれも事業母体が同窓会であったとされている。

職に就いた者であるが、最も多いのは「小学校教員」で130名(同じく、3.8%)である。「実業従事」もほぼ同数で129名(同じく、3.8%)に上る。「実業従事」者は昭和期に入ってから増加しており、特に昭和14年以降は二桁に上るようになった。

以上のように、『新潟県統計書』や同窓会報の集計で、おおよその傾向はつかめる。より具体的な進路について柏崎高女の『同窓会々報』巻末名簿や『同窓会員名簿』等(以下、単に『名簿』とする)の

記載内容から検討する。

(3) 名簿等で分かる進路

卒業直後の進路について、どのように追跡したか述べる。昭和16年の『名簿』<sup>33)</sup>、昭和18年の『同窓会々報』巻末名簿<sup>34)</sup>を用いて3,235名の卒業年、卒業回、氏名等を基礎データとした。基礎データの氏名を基に、卒業後直近(卒業年、あるいは卒業翌年、翌々年)に発行された『名簿』、『同窓会々報』巻末名簿と照らし合わせた。これらが発行された直近

【図表4】『同窓会々報』巻末名簿、『名簿』掲載の進路の情報源

卒業年 和暦	卒業回	掲載数	進路の情報源
大正10年3月	第16回	86	柏崎高等女学校同窓会編『会報 第一号』、大正11年3月※
大正11年3月	第17回	46	同編『会報 第二号』、大正11年8月※
大正12年3月	第18回	91	新潟県立柏崎高等女学校編『新潟県立柏崎高等女学校 同窓会会報 記念号』、大正13年11月※
大正13年3月	第19回	46	
昭和2年3月	第22回	124	同編『昭和三年 同窓会々報 第八号』、昭和4年1月
昭和3年3月	第23回	127	
昭和6年3月	第26回	136	
昭和7年3月	第27回	137	同編『昭和七年 同窓会員名簿』、昭和7年11月
昭和8年3月	第28回	133	
昭和9年3月	第29回	121	同編『昭和九年 同窓会々報 第十二号』、昭和9年12月
昭和10年3月	第30回	122	新潟県立柏崎高等女学校同窓会編『同窓会々報 昭和十年 第十三号』、昭和10年12月※
昭和11年3月	第31回	124	同編『昭和拾壹年 同窓会々報 14号』、昭和11年12月※
昭和12年3月	第32回	133	同編『同窓会々報 事変号 昭和十二年 第拾五号』、昭和12年12月※
昭和13年3月	第33回	145	同編『昭和十三年第拾六号 同窓会々報』、昭和13年12月
昭和14年3月	第34回	147	新潟県立柏崎高等女学校編『昭和十四年度第十七号 同窓会々報』、昭和14年12月※
昭和15年3月	第35回	154	同編『昭和十五年度第十八号 同窓会々報』、昭和15年12月※
昭和16年3月	第36回	144	同編『昭和十六年度第十九号 同窓会員名簿』、昭和16年12月
昭和18年3月	第38回	151	新潟県立柏崎高等女学校同窓会報国同編『創立40周年記念号 増改築竣工』、昭和18年12月
掲載数 計		2,167	※は柏崎市立図書館蔵

の数年間のうちは進学先などが示してあるが、それ以前の卒業生になると、住所のみの記載となるからである。卒業年(卒業回)とその卒業生の進路に関する情報源は【図表4】に示した通りである。

【図表5】の通り、追跡できたのは2,167名である。間欠的にはなるが、大正10年から昭和18年までの進路について示した。住所のみなど、進路に関する記載のない者が1,826名と84.3%を占める。

【図表5】名簿記載内容 全体

進路分類		卒業年西暦																	計	
		1921	1922	1923	1924	1927	1928	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941		1943
進学・ その他の 学修	専門学校・高師	11		8	2	10	1	2	2	2	6	3	3	6	2	6	6	8	80	
	師範学校・その他教員養成諸学校		4		2	1	5	4		1	2	5	2	3	2	6	2	4	11	54
	その他中等学校	1	1	2						2	5	6	7	1	3	8	2	2		40
	高女高等科・専攻科・補習科等	1	2	3	1						2	1	1	3	1			26	11	52
	各種学校等		1	1	1	2				2		2	4		1	1	3	8	4	30
	企業等の学校								1			1	2	1	1					6
	計	13	8	14	6	13	6	6	3	7	9	21	18	10	16	19	13	46	34	262
就職	小学校教員	4	3	7	1	6	1								2	10	7	4	45	
	その他教育従事															1			1	
	その他公務等							3		1		2				3	1	1	11	
	会社等				1			1				2	1						9	14
	計	4	3	7	2	6	1	4		1		2	3		2	14	8	14	71	
死去			1				3			2	1							1	8	
記載なし・不明	69	35	69	38	105	120	123	134	125	110	99	102	123	129	126	127	89	103	1,826	
	計	86	46	91	46	124	127	136	137	133	121	122	124	133	145	147	154	144	151	2,167

(出典は【図表4】の通り。省略する。)

進学・その他の学修をした者は262名、2,167名の12.1%であった。進学・その他の学修をした者のうち、最も多くを占めたのは専門学校・高師である。80名を確認できた。ついで、師範学校第二部、高等科・専攻科・補習科などの附設課程へ進んだ者がそれぞれ50名余りとなっている。柏崎高女では専攻科が昭和16年に設置されており、その年に「柏女専攻科」等の記載が目立つようになる。勤務先が記載されていた例は71名で2,167名の3.3%であった。最も多かったのは小学校教員で45名、2,167名の2.1%であった。以下、進学や就職について具体的な進路をみる<sup>35)</sup>。

【図表6】は専門学校や高師、師範学校、中等学校、各種学校など、「進学」とみなした者の集計である。進学とみなしたケースうち、最も多かったのは専門学校・高師であり、80名、262名のうち30.5%であった。

専門学校のうち、4分の1を実践女子専門学校が占めている<sup>36)</sup>。先に述べた通り、柏崎高女が「下田歌子女史の精神をかゝげて創立された」<sup>37)</sup>北越女学校を前身としており、また、下田歌子の来訪は北越女学校時代に数度に及んでいる<sup>38)</sup>。女学校設立運動に携わった「山田米子」、その夫である「山田順一」について、「子供さんたちをみんな歌子さんの実践女学校へ通わせるなど歌子さんに心酔されていたようです」<sup>39)</sup>との座談会での発言がある。柏崎高女だけではないかも知れないが、そのような縁の深さが、

【図表6】名簿記載内容 進学先

学校種	進学先	卒業年 西暦												通算								
		1921	1922	1923	1924	1927	1928	1931	1932	1933	1934	1935	1936		1937	1938	1939	1940	1941	1943		
専門学校・高師	日本女子大学校	2		1															1	5		
	帝国女子専門学校	1																	2	3		
	神戸女学院専門学校	1																		1		
	同志社女子専門学校			1	1																2	
	東京女子医学専門学校	1																			1	
	東洋女子歯科医学専門学校				1							1									2	
	東京女子専門学校	1										1	1	1	1					1	6	
	日本女子歯科医学専門学校			1																	1	2
	帝国女子薬学専門学校																		1		1	
	実践女子専門学校			1		5	1	1	1	1							3	2	4		19	
	帝国女子医学薬学専門学校											2		1	1		2				6	
	共立女子専門学校	1				1															2	
	日本女子体育専門学校					1															1	
	東京家政専門学校										1	1									2	
	和洋女子専門学校	1				1						1	1						3	2	9	
	女子美術専門学校			3		1			1												1	6
	東京女子薬学専門学校							1						1						1	3	
	昭和女子薬学専門学校					1															1	
	青山学院女子専門部			1																	1	
	東京女子高等師範学校	2														1					1	4
不明※	1										2									3		
計		11		8	2	10	1	2	2	2	2	6	3	3	6	2	6	6	8	80		
師範学校・その他教員養成諸学校	群馬県女子師範学校					1														1		
	山形県女子師範学校カ						1													1		
	新潟県立女子青年学校教員養成所																			1	1	
	長岡女子師範学校		4		2		4	4		1	2	4	1	3	2	6	2	4	10	49		
	帝都教育会附属教員保姆伝習所											1	1							2		
	計		4		2	1	5	4		1	2	5	2	3	2	6	2	4	11	54		
その他中等学校	共立女子職業学校		1																	1		
	高田高等家政女学校(私立、甲種実業)										1									1		
	高田高等裁縫女学校(私立、甲種実業)											1			1					2		
	財団法人長岡高等実業女学校(私立、甲種実業学校)	1		1									4		2	5	1	2		16		
	山脇高等女学校								1	1	2									4		
	私立東京女子商業学校(私立、乙種実業)			1																1		
	新潟女子工芸学校(私立、甲種実業)														1					1		
	大妻技芸学校(私立、甲種実業)									1		2				1				4		
	中京高等女学校														1					1		
	長岡高等家政女学校(私立、甲種実業)										3	3		1	1					8		
東京府立第二高等女学校保姆練習所										1									1			
計		1	1	2						2	5	6	7	1	3	8	2	2	40			
高女高等科・専攻科・補習科等	山脇高等女学校専攻科																			2	5	
	実践女学校	1	1	2	1						1										6	
	新潟県立新潟高等女学校高等科		1									1									2	
	新潟県立長岡高等女学校専攻科													2	1		1				4	
	柏崎高等女学校専攻科																25	9			34	
名古屋市立第一高等女学校専攻科				1																1		
計		1	2	3	1						2	1	1	3	1	26	11			52		
各種学校等	「栄養学院」																		1	1		
	「渡辺裁縫女学校」				1															1		
	栄養学校															1	1	1		3		
	戸板裁縫学校											2		1						3		
	桜井女塾									1										1		
	昭英学園															2				2		
	中央工学校											2			1		1	1		5		
	貞静学園									1										1		
	東京家政学院																1	1		2		
	東京女子体操音楽学校		1	1		1															3	
	日本高等洋裁学院																1	1			2	
	富士見女子高等学院					1															1	
	文化学院																	1			1	
	文化裁縫女学校											1									1	
	文化服装学院																	2			2	
洛陽高等技芸女学校											1									1		
計		1	1	1	2				2	2	4		1	1	3	8	4			30		
企業等の学校	郡是製糸株式会社誠修学院								1					2						3		
	光明家庭寮														1	1				2		
	長岡赤十字病院看護婦養成所												1							1		
計								1				1	2	1	1					6		
合計		13	8	14	6	13	6	6	3	7	9	21	18	10	16	19	13	46	34	262		

※「女子大学寄宿舎」などの記載があり、不明とした。

この進学状況にあらわれたものと考えられる。

ついで和洋女子専門学校が9名であった。「女子専門学校」「女子大学寄宿舎」「女子大学寄宿舎内」という記載があったものは、おそらく日本女子大学校であると思われるが、【図表6】では「不明」とした<sup>40)</sup>。



各種学校は30名・11.5%であった。特に中央工学校への進学はこの地域の特色であると思われる。

名簿から勤務先と判断できた者の記載内容が【図表8】である。先に述べた通り、最も多かったのは小学校教員であった。勤務校はほぼ新潟県内であり、上越、中越が中心であったかと思われる。終戦近くになると「理研」「帝石」など工業従事者の記載が複数見られるようになる<sup>47)</sup>。

### 3. 『同窓会々報』中の通信欄記述内容

次に、『同窓会々報』の通信欄からどのような生活を送っていたのか垣間見てみよう<sup>48)</sup>。

#### (1) 上級学校等への進学者

##### ①女子専門学校

専門学校等へ進んだ者に関する通信欄記述内容をいくつか挙げる。

先に述べた通り、柏崎高女は実践女学校とつながりの深い高等女学校であった。実践女学校へ進んだ大正10年3月(第16回)卒業生について、「今春実践女学校御卒業、母校へお帰りの由」<sup>49)</sup>とあり、この後、柏崎高女の教員となったことが分かる。大正15年の『中諸学校職員録』に同姓同名の人物が「裁」<sup>50)</sup>縫の教員として掲載されている。同じく大正11年3月(第17回)卒業生については、「実践女学校へ今春御入学遊ばして一心に御勉強です」<sup>51)</sup>、昭和2年3月(第22回)卒業生については、「実践女学校に在学中でいらつしやいます」<sup>52)</sup>などの記述を確認できた。

次に、日本女子大学校へ進学した者の記述をみる。大正10年3月(第16回)卒業生の2名分の記述として、「女子大学に」<sup>53)</sup>とのみあった。うち1名について、大正11年3月の同窓会報巻末名簿で確認すると、「日本女子大学校」<sup>54)</sup>との記載があった。

和裁および洋裁を学ぶ女子専門学校進学者の記述をみる。帝国女子専門学校へ進んだ者に関する記述としては、大正10年3月(第16回)卒業生の「今春帝国女子専門学校御卒業、御帰国なされしが再び御上京、大塚洋服女学校にて研究を続けて居られます」<sup>55)</sup>、同じく「帝国女子専門学校に御在学」<sup>56)</sup>と2名分を確認できた。帝国女子専門学校は「家政科を置き修業年限を三ヶ年とす」<sup>57)</sup>の学校であった。また、大正13年3月(第19回)卒業生は、「和洋裁縫学校へ行つてをられます、(中略、2名)と同居して居られるさうです」<sup>58)</sup>と、後の和洋女子専門学校へ進んでいる。

「美術学校」で学んだ卒業生がいた。昭和12年3月(第32回)卒業生に関するものとして、「東京の美術学校で日本画と刺繍とをお勉学です」<sup>59)</sup>との記述があったが、専門学校かどうかは不明である。「一筋道をととも御熱心にお励みで教壇にお立ちになる日も間もない事でございます」と続けられており、教員を志望していたことが分かる。

中等学校教員となった者については、後にも述べるが、ここでは、柏崎高女を卒業して専門学校へ進み、その後中等学校教員となったことを追跡できた者に限って検討する。大正10年3月(第16回)卒業生に関する記述として、「今春和洋裁縫女学校御卒業、鳥取県の女学校でお勤めです」<sup>60)</sup>などが挙げられる。「鳥取県の女学校」の職員としては確認できなかったが、大正15年の『中諸学校職員録』をみると、新潟県立高田高等女学校の「裁」の教員に同姓同名の人があった<sup>61)</sup>。

昭和2年3月(第22回)卒業生の一人は、名簿から「実践女学校高等師範部裁縫科」<sup>62)</sup>に進学したこ

【図表8】勤務先の記載内容

分類	卒業年	勤務先	
小学校 教員	1921	「柿崎町尋常高等小学校」「鯨波尋常小学校」「中川尋常小学校」「片貝尋常高等小学校」	
	1922	「鶴川尋常高等小学校」「岡野町尋常高等小学校」「加茂尋常高等小学校」	
	1923	「鶴川尋常高等小学校」「結城野小学校」「高梨小学校内」「第二小学校」「中鯖石尋常小学校」「中里尋常小学校内」「直田尋常小学校」	
	1924	「倉股小学校」	
	1927	「荒浜尋常高等小学校」「高田尋常小学校」「犀潟尋常小学校」「田尻尋常小学校」「北条第一尋常小学校」「蘆ヶ崎尋常小学校」	
	1928	「浦佐小学校」	
	1939	「高尾尋常小学校」「板堀校」	
	1940	「安田小学校」「岡田小学校」「岡野町小学校」「高柳村荻漆小学校」「山横沢小学校」「上小国増田小学校」「森光小学校」「石地小学校」「北条第二小学校」「北条第二小学校」	
	1941	「下黒川国民学校」「勝山国民学校」「中通国民学校」「柏崎国民学校」「北鯖石国民学校」	
	1943	「柏崎国民学校」「北野国民学校」「野田国民学校」	
	その他教育 従事	1940	「柏崎幼稚園」
	その他公 務等	1931	「三千浦医院」「逓信省簡易保険局」「柏崎町電話交換局」
		1933	「新潟医科大学附属病院看護婦寄宿舎」
1936		「柏崎郵便局」「柏崎郵便局」	
1940		「関根医院」「日本赤十字社病院」「柏崎市四ッ谷局」	
1941		「四ッ谷郵便局」	
1943		「上舞鶴海軍工廠」	
会社等	1924	「山田染工場内」	
	1931	「松屋本店内」	
	1935	「鎌子醤油株式会社」「日石社宅」	
	1936	「新潟鉄工所柏崎工場」	
	1943	「帝石」「帝石勤務」「東栄鉄工所」「日本無線芙蓉寮内」「理研」	

とが分かる。昭和5年発行の『同窓会々報』通信欄には、「今春学校を御卒業なさつて、只今は長岡市の家政女学校におつとめになつていらつしやいます。毎日々々汽車通学でさぞお苦しいことと存じます」<sup>63)</sup>とあり、「実践女学校高等師範部裁縫科」を経て長岡高等家政女学校<sup>64)</sup>に裁縫の教員として勤務したものである<sup>65)</sup>。

## ②医専、歯科医専、薬専等

医学・薬学の専門学校へ進んだ者に関する記述をみる。大正10年3月(第16回)卒業生について、「東京女子医学専門学校に」<sup>66)</sup>との記述が、また、翌大正11年3月(第17回)の卒業生については、「一心に御勉学遊ばし」、「女子医専へ御入学遊ばして東都に研究をつづけて居」<sup>67)</sup>たとの記述がみられた。歯科医者を目指し、東洋女子歯科医学専門学校へ進学した大正13年3月(第19回)卒業生は、「明華女子歯科医学専門学校へ御入学です、専らお医者さまになるべく御勉強中です」<sup>68)</sup>と紹介されている。薬学を修めた者としては、昭和2年3月(第22回)卒業生に関する「薬学専門学校に御在学中でいらつしやいます」<sup>69)</sup>との記述、あるいは、昭和12年3月(第32回)卒業生に関する「薬専でお勉強されて明哲な御頭脳を益々お磨きです」との記述を確認した。後者の卒業生は、「クラス会には宗教と哲学で火花を散らされました。相手は有名な〇〇<sup>(史料表記のママ―筆者註)</sup>さんです」<sup>70)</sup>と、旧友とアカデミックな議論を交わしたようである。「第三者の八銭のイチゴが驚いて溶けました。来年からは二十銭位のを用意しなければなりませんね」と付け加えられている。

各種学校等で学んだ者について触れておく。昭和3年3月(第23回)卒業の2名について、「毎日御元気で宮川産婆学校にお通ひ下さうです」<sup>71)</sup>との記述が見られた。あるいは、昭和11年3月(第31回)卒業生の一人は「長岡日赤看護婦養成所」<sup>72)</sup>で学んだ。医療従事者、とりわけ「看護婦」や「産婆」を目指した者は、「給費生」として待遇され、彼女らには服務義務が課された<sup>73)</sup>。

## ③女子高等師範学校

次に、記述は少ないが、女子高等師範学校へ進学した者についてである。大正10年3月(第16回)卒業生で東京女子高等師範学校へ進学した卒業生に関する記述があった。「女子高等師範に御勉学中、来年の三月は御卒業の筈なれば此の冬休みには是非此の柏陽の里へ訪れて頂きたいものと存じて居ります」<sup>74)</sup>と紹介されている。彼女については、大正14年1月22日の『読売新聞』に、「朝鮮婦人」として初の東京女高師卒業者として取り上げられている<sup>75)</sup>。女子高等師範学校への進学は難関であり、新潟高女においても、例年数名であった(前掲、【図表1】参照)。

## (2) 女子師範学校第二部

師範学校第二部等へ進んだ卒業生について検討する。

先にも述べた通り、進学と判断できたケースのうち、長岡女子師範学校へ進んだ者が最多であった。同校へ進んだ昭和3年3月(第23回)卒業生の一人について、「『オラタの先生』と小さい子供等にしたはれながら毎日々々ゴトンノと北条第一まで御通勤」<sup>76)</sup>とあり、「駅のすぐそば」の北条第一尋常高等小学校へ電車通勤していたと推察できる。

【図表6】にも示したように、群馬県や山形県の女子師範学校へも進んでいる。昭和3年3月(第23回)卒業生の一人について、「山形県の師範をお卒業になつて今ではあちらで教鞭をとつて居られます。先日は田植休に来て居られましたが又稲刈休に来られる事で御座いませう」<sup>77)</sup>と紹介されている。農繁期に帰省したのか、「田植休」「稲刈休」に戻っている<sup>78)</sup>。

昭和18年3月(第38回)卒業生の5名については、「(5名、姓のみ列記)さんは臨教を卒へて、小国民錬成の為教壇に立つて居られます」<sup>79)</sup>と記述されている。昭和10年代には教員不足が深刻となり、教員を短期に養成する必要があった。新潟県では昭和13年2月に新潟県臨時教員養成講習所規程を定め、各師範学校に1学級30名、講習期間6ヵ月の講習所を設けた<sup>80)</sup>。このうち一名について、昭和18年の

名簿に「長岡女子師範臨教」<sup>81)</sup>と記載されている。

### (3) 学校教員、公務等、会社等

#### ①学校教員

勤務先が記されている通信欄の記述について検討する。まず、中等学校教員についてである。【図表3】によると、第1回から第18回卒業生まで、23名の者が中等学校教員となっている。少数ながら、高等教育機関の教員になり、戦後は新制大学で教鞭をとったケースもあった。

昭和2年3月(第22回)卒業生の一人について、「仙台市の尚(ママ、「綱」カ一筆者註)綱女学校におつとめになつていらつしやいます」<sup>82)</sup>と紹介されている。仙台の尚綱女学校であろうか、中等学校教員として活躍したと思われる<sup>83)</sup>。この記載の2年前、彼女が卒業した直後の昭和3年の『同窓会報』巻末名簿には「日本女子体育専門学校」との記載があった。彼女はその後、勤務先を転々としており、昭和12年の『同窓会々報』では、「立派に洗礼をおうけになつて信仰の道にお入りになつていらつしやいますとか。物やはらかな御様子温みの溢れたまなごし、お話を伺つてゐる中に何かしら教へられる所がたく山あります只今神戸の女学院におつとめでいらつしやいます」<sup>84)</sup>との記述があった。また、昭和16年の『同窓会員名簿』では「神戸女子専門部寄宿舎」<sup>85)</sup>との記載があった。このことから、彼女は、柏崎高女卒業後、日本女子体育専門学校へ進学し、その後、仙台尚綱高等女学校を経て、神戸女学院専門学校に勤めたことが分かる<sup>86)</sup>。

同年の別の卒業生は柏崎高女卒業後に「日本体育会体操学校」へ進み、その後、昭和5年の『同窓会々報』には「北海道の岩見沢高女で教鞭をとつて」<sup>87)</sup>いとある。

進学先は不明だが、昭和12年3月(第32回)卒業生の一人は、「柏崎実業女学校にお勤めで、お得意の英語、家事、体操の御担任で腕と脚をお振ひ」<sup>88)</sup>になったようである。

小学校教員となった卒業生に関する記述をみる。先に示した【図表8】の通り、通信欄から小学校教員となった者を多数確認できた。学校名から多くは柏崎近辺で教員を勤めていたと判断できる。なお、大正11年3月(第17回)卒業生のように、「小学校へおつとめの由」<sup>89)</sup>など、具体的な小学校名が判らないものはここでは省略した。

また、「学校看護婦」の増加とともに、昭和9年の『同窓会々報』には、「大洲小学校で看護婦としてスマートな御洋装でお通ひ」<sup>90)</sup>(昭和6年3月・第26回卒業生)という人物に関する記述もみられた。なお、「学校看護婦」は、昭和9年には全国で3,092人に上っている<sup>91)</sup>。

#### ②その他公務等

その他公務、会社等に勤めた卒業生に関する通信欄の記述をみる。交通・通信業に従事した者に関する記述として、大正10年3月(第16回)卒業生の「あの鋭敏な頭を以て柏崎駅で電話の交換をやつて居られます」<sup>92)</sup>、あるいは、昭和2年3月(第22回)卒業生の「鉄道の方におつとめになつていらつしやいます」<sup>93)</sup>などがあつた。

また、郵便局に勤めたというケースが複数あつた。「郵便局におつとめでいらつしやいます」(昭和2年3月・第22回卒業)<sup>94)</sup>、「一時郵便局にお勤めでしたが今はお家にいら(ママ一筆者註)しやいます」(昭和12年3月・第32回卒業)<sup>95)</sup>、「(前略、姓のみ1名)さんは七丁目の郵便局に(後略)」(昭和18年3月・第38回卒業)<sup>96)</sup>などの記述が認められた。

官公庁、役場で勤めた卒業生に関しては、昭和3年3月(第23回)卒業生について、「ずつと前に伺つたのでございますけど東京の陸軍省にお勤めの由。無事にお(「くら」カ、よみ不明一筆者註)活(ママ一筆者註)しになれます様遠方からおいのり致します」<sup>97)</sup>と紹介されている。また、昭和6年3月(第26回)卒業生が「町役場でソロバンをはじいて居られ」<sup>98)</sup>という記述があつた。その他、「図書館にお勤めで好きな編物や裁縫を暇に励ん」<sup>99)</sup>だという、昭和18年3月(第38回)卒業生があつた。

先に述べた通り、「看護婦」や「産婆」の養成機関へ進んだ者がいたが、次に示す通信欄の記述は、実際にそれとして活躍したと思われる者のケースである。昭和2年3月（第22回）卒業生に関して「宮川医院においでになります」<sup>100)</sup>と、あるいは、昭和6年3月（第26回）卒業生について「大橋医院で相変わらずお元気に働いておいで、す」<sup>101)</sup>と紹介されている。また、昭和2年3月（第22回）卒業生について、「新潟の赤十字社にお入りになつていらつしやると承りましたが……………」<sup>102)</sup>との記述されている。日本赤十字社の看護婦養成所で教育を受けているのか、あるいは「看護婦」として勤務しているのか、不明である。

### ③会社等

【図表3】にもみた通り、昭和に入ってから「実業従事」者が増加している。大正10年3月（第16回）卒業生に関して、「可愛い坊ちゃん相手に鯨波のホテルにお働きになつて居らつしやいます」<sup>103)</sup>との記述があったが、以下に示したものは昭和期のものである。

「職業婦人」の代表である、タイピストや百貨店店員についての記述がみられた。明治末あるいは大正のはじめ頃には男性の方が多かったタイピストは、昭和に入ると女性が大半を占めるようになった<sup>104)</sup>。昭和2年3月（第22回）卒業生について、「東京でタイピストをなさつていらつしやる」<sup>105)</sup>と記述されているが具体的な会社等の名前は不明である。いわゆる「デパートガール」といわれた百貨店店員について、おそらく白木屋百貨店に勤めたものと思われる記述があった。昭和2年3月（第22回）卒業生の二人について、「白木屋におつとめになつていらつしやいます。今度仲よしの（中略、1名）さんが御一緒におつとめになりました由きつと／＼お喜びのこと、思ひます」<sup>106)</sup>、「只今（中略、1名）さんと同じく白木屋へおつとめになつていらつしやいます」<sup>107)</sup>とある。この二人は同じ白木屋に勤めていたことをうかがうことができる。後者については、昭和10年の『同窓会々報』に「東京白木屋」<sup>108)</sup>との記載があった。あるいは、「長岡の建設事務所におつとめ」（昭和3年3月・第23回卒業生）<sup>109)</sup>のようなケースもあった。

理研コンツェルン傘下の工場群が建設されるとともに、それ以降、理研関連会社に勤めたケースが散見されるようになった。卒業したのは昭和6年3月（第26回）であるが、「東京の製図学校を御卒業後（ママ、「理研」カー筆者註）理研で冴えたお頭を働かせて」<sup>110)</sup> いるとの記述があった。どのくらいの収入があったのか不明だが、「月給日にはオゴつて下さるさうですから……………」と続けられている。

いわゆる「共働き」であったか、昭和6年3月（第26回）卒業生について、「御夫君は郵便局、御自分では理研へお勤め」であり、「お休みにはお二人でお揃ひでお出かけの由」<sup>111)</sup> という生活ぶりが描かれている。また別の、同年の卒業生については、「東京で御洋裁の腕を磨いた上一流洋裁店で立派なデザインでお忙しい日々」を送り、「御自分は勿論御洋装」で過ごした様子が分かる。「あのピッタリした御様子から見ましても冴えた腕が伺はれます。御洋装なさるお方は御相談なさつては如何でございますか？」<sup>112)</sup>と紹介されている。彼女については、昭和16年時点でも所在は東京府であった。

昭和9年3月（第29回）卒業生は、「（前略、4名）様、皆様御元気で理研へ御通ひでございます」<sup>113)</sup>と一度に4名が就職している。先行研究の示すように、柏崎市には、「理研チャック」「理研宮内鑄造」「理研十尺旋盤」「柏崎興業」「比角自転車」といった理研コンツェルン下の会社が複数設立されていた<sup>114)</sup>。理研関連会社にみられるような製造業への就職はこの地域の一つの特色と言えよう。

昭和18年3月（第38回）卒業生になると、「実業」、特に工業に従事したことが分かる記述が目立つようになる。「西川鉄工所」「東栄製作所」「㊦へ」「（前略、4名）さんは帝石へ」「（前略、2名）は東京の学校」「安田の農会」<sup>115)</sup>など、各分野へ就職している。「帝石」は、昭和16年に設立された、「帝国石油株式会社法に基づく半官半民の石油上流専業会社」<sup>116)</sup>であった。

## おわりに

あくまで、新潟高女など、他の県立との比較においてであるが、柏崎高女卒業者において、専門学校等や師範学校第二部へ進んだ者の比率は高い方ではあった。専門学校等については新潟高女には及ばなかったものの、特定の学校、すなわち実践女学校（実践女子専門学校）との縁が深く、恒常的に同校に進学していたことが分かった。実践女学校（実践女子専門学校）を経て新潟に戻り、「母校にお帰り」、あるいは「長岡市の家政女学校におつとめ」というように、中等学校等の教員となった事例がみられた。

また、長野県の事例と同様、女子師範学校第二部等への進学が一定数みられた<sup>117)</sup>。長岡女子師範学校への通学が可能であり、同校第二部への進学を経て、県内小学校教員として勤めるという一つのルートが形成されていた。教育職については、先にも述べた通り、高等教育機関を経由して中等学校教員となるケースも散見された。

太平洋戦争以降になると、「理研」や「帝石」、「西川鉄工所」、「東栄製作所」などの製造業従事者がみられるようになった。『六十周年記念誌』には、「生徒の工場出勤の始まったのも、この十九年からで、はじめは北日本食品工場に上級生が輪番制で出ていたが、七月二十五日に理研柏崎工場、九月二日に霜田木工所及び校内工場（遠藤動力工場、刈羽村出身、遠藤氏の経営）にと学業を捨てて継続的に出勤するようになり、学校は一、二年生だけとなつてしまつた」<sup>118)</sup>との記述がある。戦時下という時代状況もあるが、工業化が進むこの地域で、その産業を支えたという側面を見出すことができる。

明治期においては、男子中等教育に比し、女子のそれに高い価値が見出されていなかった。また、学校史にもみられたように、柏崎においては、新潟、長岡、高田、新発田のような高等女学校設置の必要性は低かった。しかし、篤志家による高等女学校設置の請願や下田歌子らのような一部女子による運動によって、当地における高等女学校の設置が叶った。さらに、進学先として、このような覚醒した女性と所縁のある一部の学校に集中していたことは、柏崎高女の特質として指摘できる。

昭和期に入ると、高女卒業生予定者を対象に上級校への、いわば「キャリア教育」が始められた。同窓会の意向による専攻科の設置や女子実業従事者の増加など、明治期の「良妻賢母」育成とは異なる動きがみられた。

同窓会報の記述を借りれば、高等女学校卒業者が「明哲」な「頭脳」、「鋭敏な頭」に価値を求めていることが分かる。「賢母」である前に、「職業婦人」として賢明に生きていくためには、それ相応の知識や技能、経験が求められた。しかも、学卒後、それを発揮できるようにするためには、「腕」や「頭」をさらに磨かねばならない。「良妻賢母」を育てるといふ、当初の高等女学校の教育内容が次第に変化し、社会的自立に向けてその教育の裾野を拡げ始めたことと捉えることができる。

**【謝辞】** 本研究を進めるにあたり、川口雅昭人間環境大学名誉教授、矢田貞行東海学園大学教授に御指導賜った。また、東海学園大学図書館諸氏に、御高配・御助言を賜った。【図表7】の路線図等の転載にあたっては、株式会社野島出版様より許諾を頂いた。ここに謝意を表す。なお本稿は、中国四国教育学会第75回大会（於・広島大学）「教育史」部会で令和5年11月26日に行った研究報告「新潟県立柏崎高等女学校における卒業生の進路」に加筆、修正を加えたものである。

## 註

- 1) 令和6年9月30日現在の「住民基本台帳人口に基づく人口と世帯数」によると76,536人である（柏崎市ホームページ「柏崎市の人口」、<https://www.city.kashiwazaki.lg.jp/soshikiichiran/sogokikakubu/kikakuseisakuka/2/14/28534.html>：令和6年11月2日閲覧）。なお、本稿では、史料等を引用する際、

人名等を除き、旧字体を新字体に改めた。また、発行年は奥付表記のままとした。

- 2) 「3-2 全国・新潟県・柏崎市の人口および人口密度」柏崎市編『柏崎市統計年鑑 令和5(2023年版)』柏崎市役所、令和6年3月、19頁参照 ([https://www.city.kashiwazaki.lg.jp/material/files/group/5/R5\\_toukeinennkann.pdf](https://www.city.kashiwazaki.lg.jp/material/files/group/5/R5_toukeinennkann.pdf): 令和6年11月2日閲覧)。同表には「現市域に組み替えた人口」が掲載されている。昭和10年の、現柏崎市に相当する地域の人口は100,342人であった。なお、同年の「人口密度(1kmあたり)」は、全国で181人、現柏崎市に相当する地域で227人であった。
- 3) 「柏崎市」「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 15 新潟県』角川書店、1989年、1478頁参照。
- 4) 「柏崎[市]」平凡社編『世界大百科事典 5』平凡社、2014年改訂新版第6刷、282頁参照。
- 5) 「柏崎市」平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 一五巻 新潟県の地名』平凡社、1986年、476頁参照。同書の新潟県における鉄道網の整備については、下記のように記述されている。

(前略) 鉄道網の整備は明治一九年の信越線直江津一関山(現中頸城郡妙高村)間開通に始まり、同二六年の直江津一高崎(現群馬県高崎市)間全通、同二九年北越鉄道着工、同四〇年同鉄道国有化による信越線との接続、大正二年の北陸線全通・越後鉄道(現国鉄越後線)開通、同三年の岩越線(現国鉄磐越西線)全通、同一二年蒲原鉄道五泉一村松(現中蒲原郡村松町)開通、同一三年の羽越線全通、昭和四年の飯山鉄道(現国鉄飯山線)全通などと続く。同六年九月一日上越線が全通、首都と新潟県を最短距離で結ぶ鉄路が完成した。その後同一年には米坂線全通、同三一年には白新線が全通した。上越線全通後、新潟県は工場課税特免条例を制定して企業誘致に乗出した。この結果、昭和七年日曹製鋼直江津工場、同九年日本ステンレス直江津工場・理研製鋼柏崎ピストンリング工場・中央電気工業田口工場・昭和合成化学鹿瀬工場、同一〇年日本鋼管新津工場などが続々誕生、農業中心体制から農工両全体制に向けて動き出した。しかし実現は日中戦争・太平洋戦争の後へ持越された。(後略) (『総論』平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 一五巻 新潟県の地名』平凡社、1986年、20頁)
- 6) RIKEN ホームページ「沿革」参照 (<https://www.riken.co.jp/company/history.html>: 令和5年10月11日閲覧)。また、『角川日本地名大辞典』によると、「昭和初期から理研が進出して大工場を建設、第2次大戦末期には1万人近い従業員を擁していた」(『〔近代〕比角』『角川日本地名大辞典』編纂委員会編『角川日本地名大辞典 15 新潟県』角川書店、1989年、1124頁)とある。
- 7) 深谷昌志『増補 良妻賢母主義の教育』黎明書房、昭和56年。
- 8) 土田陽子『MINERVA 社会学叢書④ 公立高等女学校にみるジェンダー秩序と階層構造—学校・生徒・メディアのダイナミズム—』ミネルヴァ書房、2014年、2頁。
- 9) 土田陽子「地方における高学歴女性のライフコース選択—県立和歌山高等女学校の事例から—」『紀州文化研究所紀要』第37号、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、2016年、1-16頁参照。
- 10) 安藤耕己・倉知典弘・大蔵真由美・栗山究「資料 昭和期日本を対象とする青年期教育研究の成果と課題」山形大学教職研究総合センター編『教職・教育実践研究』第16号、2021年、48頁。
- 11) 前掲、土田陽子『公立高等女学校にみるジェンダー秩序と階層構造』、9頁。
- 12) 新潟県教育百年史編さん委員会編『新潟県教育百年史 明治編』(新潟県教育庁、昭和45年)、同編『新潟県教育百年史 昭和前期編』(新潟県教育委員会、昭和48年)。
- 13) 新潟県立柏崎常盤高等学校「創立六十周年記念誌」編集委員会編『創立六十周年記念誌』新潟県立柏崎常盤高等学校、昭和39年。以下、同書を単に「『六十周年記念誌』」と略記する。
- 14) 新潟県における高等女学校の沿革については、佐藤環「新潟県における高等女学校の弓道教育」(『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』66号、2017年、351-366頁)も参照した。

- 15) 『新潟県教育百年史 明治編』、730 頁参照。
- 16) 『官報』第 4991 号、明治 33 年 2 月 23 日、322 頁（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/2948284/1/2>：令和 6 年 9 月 15 日閲覧）。以下、「<https://dl.ndl.go.jp/>」で始まる URL は同コレクション。
- 17) 『新潟県教育百年史 明治編』、728 頁参照。「新潟県高等女学校規則」については、新潟県第三課編『新潟県第三課校閲 学事法規』文港堂、明治 35 年、137-148 頁（<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/797250/>：令和 6 年 9 月 15 日閲覧）。
- 18) 『新潟県教育百年史 明治編』、732-735 頁参照。
- 19) 4 校の県立移管については、『官報』第 7122 号、明治 40 年 3 月 30 日、782 頁参照。
- 20) 『新潟県教育百年史 明治編』、735 頁。
- 21) 『六十周年記念誌』、2 頁。
- 22) 『新潟県教育百年史 明治編』、1284 頁。
- 23) 『新潟県教育百年史 明治編』、736 頁参照。長岡高女については、一度「市立」と冠されていたようである（新潟県立長岡大手高等学校ホームページ「長岡大手高校のあゆみ」、<http://www.nagaokaoh-te-h.nein.ed.jp/intro.html>：令和 5 年 11 月 17 日閲覧）。また、「長岡市政ライブラリー」にも「明治・大正期」の「長岡市のあゆみ」として「40 年 郡立長岡高等女学校、長岡市立長岡高等女学校と校名を改称」と記載されている（<https://www.city.nagaoka.niigata.jp/elibrary/ayumi/nagaoka01/>：令和 5 年 11 月 17 日閲覧）。
- 24) 『六十周年記念誌』、3 頁。下記の『国史大辞典』の記述によると、新潟港が「五港」の一つである。（前略）明治元年（一八六八）には新政府軍の攻撃をうけ約五百戸焼失。同年安政五箇国条約による五港の一つとして開港、運上所・領事館などが設けられた。しかし貿易不振のため明治十二年までにすべての領事館が引き揚げ、その後、新潟は明治二十年代から北洋漁業と対岸貿易の基地として発展、また製油所とこれに関連する機械工業、硫酸、化学肥料工業が成立、大正三年（一九一四）には沼垂町を合併して工業都市として発展。大正十五年には新潟築港が完成、昭和六年（一九三一）には上越線が開通して市の発展に大きな影響を与えた。（『新潟国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第十巻』吉川弘文館、平成 9 年、817 頁）
- 25) 「本科及実科前年度卒業生ノ本年度末ノ状況」新潟県編『大正十三年十二月刊行 新潟県統計書 第二編（教育）』新潟県、大正 13 年、54-55 頁（<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/972473/1/35>：令和 6 年 11 月 2 日閲覧）。
- 26) 『新潟県教育百年史 大正前期編』、632 頁。
- 27) 『新潟県教育百年史 大正前期編』、146 頁参照。
- 28) 『新潟県教育百年史 大正前期編』、1002 頁参照。
- 29) 『新潟県教育百年史 大正前期編』、1003 頁参照。
- 30) 新潟県立柏崎高等女学校同窓会報国団編『創立 40 周年記念号 増改築竣工』新潟県立柏崎高等女学校、昭和 18 年 12 月、8-9 頁。以下、同誌を引用する場合は、「『創立 40 周年記念号』、昭和 18 年 12 月、8-9 頁。」のように略記する。
- 31) 『創立 40 周年記念号』、昭和 18 年 12 月、8 頁。
- 32) 『新潟県教育百年史 大正前期編』、984 頁。
- 33) 新潟県立柏崎高等女学校編『昭和十六年度第十九号 同窓会員名簿』、昭和 16 年 12 月。
- 34) 『創立 40 周年記念号』、昭和 18 年 12 月、巻末名簿。
- 35) 学校種等の分類にあたり、本研究では以下の様に取り扱った。  
「京都洛陽高等女学校洋裁科」との記載…各種学校の洛陽高等技芸女学校とみなした（『京都

府学事関係職員録 昭和十六年  
四月十五日現在 京都府教育会、昭和6年、85頁参照。

「一ツ橋女子職業学校」との記載…「神田区一ツ橋通二一・二二番地」（東京市役所編『東京都学校案内 昭和四年版』三省堂、昭和3年、118頁）の共立女子職業学校とみなした。

「東京実践女学校」「実践女学校」「実践女学校寄宿舎」など…実践女学校とみなした。実践女子学園八十年史編纂委員会編『実践女子学園八十年史』（実践女子学園、昭和56年、677頁）によると、実践女学校では大正14年1月、専門学校令により実践女学校高等女学部専攻科が「専門学部」となった。また、「前年度以降の専門学部国文科卒業生に対し国語科中等教員無試験検定の特典を受ける。専門学部家政科技芸科卒業生に中等教員免許状下附の継続許可される」（同頁）とある。

「東京実践女学校専門学部」「東京実践専門学校」など…実践女子専門学校とした。

36) 実践女子専門学校としてカウントした者の記載内容は下記の通り。

「実践女学校高等師範部裁縫科」「実践女学校専門学部家政科」「実践女学校専門部」「実践女学校専門部家政科」「実践女学校専門部技芸科」「実践女学校専門部国文予科」「実践女子専（ママ、「門」か一筆者註）問学校」「実践女子専門学校」「渋谷実践専門学校家政科」「東京実践女学校専門学部」「東京実践専門学校」「東京実践専門学校家政科」

37) 『六十周年記念誌』、2頁。

38) 『六十周年記念誌』、2頁参照。

39) 「座談会 常盤高校六十年の歩み」『六十周年記念誌』、62頁。

40) 成瀬仁蔵は新潟女学校の初代校長であり、また、明治43年8月に新潟県を訪問して講演を行っている。その際に、柏崎高女で開かれた歓迎会に足を運んだようである〔桜楓会出版部編『桜楓文庫12 成瀬先生講演集 第八』桜楓会出版部、昭和15年、41頁参照（<https://dl.ndl.go.jp/pid/1458165/1/26>：令和6年11月3日閲覧）〕。

41) 新潟県の師範学校は、新潟県新潟師範学校（新潟市）、新潟県高田師範学校（高田市）、女子師範学校は、新潟県長岡女子師範学校（長岡市）があった。修業年限について、長岡女子師範の第二部は2年、専攻科は1年であった。昭和9年度の生徒数は、第二部が51名、専攻科が5名であった〔文部大臣官房文書課編『大日本帝国文部省年報第六十二年報昭和九年四月下巻』、昭和13年、附録10頁参照（<https://dl.ndl.go.jp/pid/1452388/1/276>：令和5年10月28日閲覧）〕。

42) 「長岡女子師範二部」「長岡女子師範学校」「長岡女師範学校寄宿舎」「長岡女師」などの記載は長岡女子師範学校第二部への進学とみなした。

43) 新潟県長岡女子師範学校編『新潟県長岡女子師範学校一覧』、大正7年、10頁（<https://dl.ndl.go.jp/pid/910589/1/9>：令和6年11月3日閲覧）。

44) 『新潟県教育百年史 大昭和前期編』、239頁参照。

45) 『新潟県教育百年史 大昭和前期編』、228頁参照。第二部の修業年限について、同書には「女子の場合、本県は修業年限二年」との記述がある。

46) 『新潟県教育百年史 大昭和前期編』、240頁。

47) このほか、理研コンツェルンについて、「新潟県柏崎にあった理研重工業柏崎工場だけで最盛期万を越える工具を抱え」（斎藤憲『新興コンツェルン理研の研究』時潮社、平成2年、255頁）たとの記述がある。

48) 通信欄記述は、【図表5】【図表6】に示した名簿等で進路が判明できない者も含んでいる。消息不明の卒業生もあり、卒業生全員に関する記載ではない。例えば、第22回卒業生の消息について、「第二十二回の皆様に」の最後に、以下のように記してある。

皆様の御様子をお知らせ致したいと思いましたが随分沢山の方々が御消息が判らないでし

まひました。又きつと随分まちがったことも申し上げてあること、存じます。どうぞ皆様の御承知の様にあのいつもかはらない、そそつかし屋の私のことをございますからお許し下さいませ。(『同窓会々報』第10号、昭和5年12月、69頁)

また、「第二十三回の皆様へ」として、冒頭に「最後の竹クラスの方の御消息をお知らせ致します」(『同窓会々報』第8号、昭和4年1月、51頁)とあり、「竹クラス」の紹介の後、「以上が私の知つて居ります全部で御座います出来るだけ多く載せたかつたんですけれど何分御住所不明の方もありますので予期したより書けませんでした」(同、54頁)との記述がみられた。さらに、「同窓の皆様へ」として、第26回卒業生の一部の近況を掲載した後、「この方達の他ににお嫁にいらつした方や、職業婦人として又は御兄弟の御手伝へで遠くへ行つてお出での方が沢山おありです。又家庭で種々の御稽古事にいそしんでお出での方も御座いますが、私達が不行届きの為め皆様に充分なお知らせが出来ず残念でございますがどうぞお許し下さいませ。」(『同窓会々報』第12号、昭和9年12月、25頁)とある。

- 49) 新潟県立柏崎高等女学校編『柏崎高等女学校 同窓会々報 記念号』、大正13年11月、78頁。以下、同誌から引用する際は、「『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、78頁」のように略記する。
- 50) 中等教科書協会編『大正十五年五月現在 第二十三版 諸学校職員録』中等教科書協会、大正15年、303頁 (<https://dl.ndl.go.jp/pid/937376/1/223> : 令和5年11月19日閲覧)。
- 51) 『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、83頁。
- 52) 『同窓会々報』第10号、昭和5年12月、65頁。
- 53) 『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、74頁。
- 54) 『会報』第1号、大正11年3月、49頁。
- 55) 『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、73-74頁。
- 56) 『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、74頁。
- 57) 帝国教育会編『教育年鑑』南北社、大正9年、262頁 (<https://dl.ndl.go.jp/pid/937294/1/141> : 令和6年9月15日閲覧)。
- 58) 『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、81頁。
- 59) 『同窓会々報』第18号、昭和15年12月、25頁。
- 60) 『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、76頁。なお、和洋女子大学ホームページ「大学紹介」によると、同校は昭和3年に和洋女子専門学校となり専門学校令にもとづく学校となった (<https://www.wayo.ac.jp/introduction/info> : 令和6年11月2日閲覧)。
- 61) 中等教科書協会編『大正十五年五月現在 第二十三版 諸学校職員録』中等教科書協会、大正15年、303頁参照 (<https://dl.ndl.go.jp/pid/937376/1/223> : 令和5年11月19日閲覧)。
- 62) 『同窓会々報』第8号、昭和4年1月、巻末名簿36頁。
- 63) 『同窓会々報』第10号、昭和5年12月、68頁。
- 64) 文部大臣官房文書課『日本帝国文部省第五十八年報 皇昭和五年四月 下巻』文部大臣官房文書課、昭和11年、附録104頁参照。
- 65) 長岡高等家政女学校は私立の甲種実業学校である(文部大臣官房文書課『日本帝国文部省第五十八年報 皇昭和五年四月 下巻』文部大臣官房文書課、昭和11年、附録104頁参照)。なお、中等教科書協会編『昭和五年五月現在 第二十七版 諸学校職員録』中等教科書協会、昭和5年、422頁 (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1448223/1/295> : 令和6年9月6日閲覧) に、「裁」の教員として掲載されている。
- 66) 『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、74頁。
- 67) 『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、82頁。
- 68) 『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、80頁。明華女子歯科医学専門学校は大正15年に東洋女

子歯科医学専門学校に改称した（『官報』第4241号、大正15年10月12日、286頁参照）。

- 69) 『同窓会々報』第10号、昭和5年12月、68頁。『同窓会々報』第8号、昭和4年1月、巻末名簿36頁に「日本女子薬学校」とあり昭和女子薬学専門学校と判断した。
- 70) 『同窓会々報』第18号、昭和15年12月、25頁。『同窓会々報』第15号、昭和12年12月、巻末名簿100頁には「帝国女子医学薬学専門学校第一寄宿舎」とあり、帝国女子医学薬学専門学校と判断した。
- 71) 『同窓会々報』第8号、昭和4年1月、54頁。正式名称は「柏崎産婆学校」、学校種は「其ノ他ノ各種学校」である〔新潟県編『大正十四年十二月刊行 新潟県統計書 第二編（教育）』、大正14年、88-89頁参照（<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/972481/1/53>：令和5年11月8日閲覧）〕。同校は、明治32年11月に「赴庵病院産婆学校」、翌年10月「私立柏崎産婆学校」と改称した。なお、「一般には『宮川産婆学校』と呼称されていた」〔蒲原宏『新潟県助産婦看護婦保健婦史』新潟県助産婦看護婦保健婦史刊行委員会、昭和42年、89頁（<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/2518156/1/58>：令和5年11月8日閲覧）〕とされている。
- 72) 『同窓会々報』第14号、昭和11年12月、37頁。前掲、蒲原宏『新潟県助産婦看護婦保健婦史』では、「日本赤十字社新潟支部病院（長岡赤十字病院）看護婦養成所」について以下のように説明されている。
- 赤十字救護看護婦となるにはその基礎学力が旧制四年制高等女学校卒業者及び同等以上の学力を有しなければ入所資格がなく、かつ教育課程が三ヵ年間であつたのでその応募者の資質と教育内容は当時の県下の最高レベルのものであつた。
- 昭和七年から日本赤十字看護教程にもとづいて救護看護婦の養成が開始され、日本赤十字社新潟支部病院（長岡赤十字病院）における第一回卒業生は昭和十年三月二十五日に笹川春江、松野広子ら十八名が送り出された。（308頁）
- なお、日本赤十字社の看護婦養成所においては、学費はなく、「在学中手当」「現食」が支給された。例えば芳進堂編集部編『最新東京女子学校案内』〔武田芳進堂、213頁（<https://dl.ndl.go.jp/pid/1466336/1/119>：令和6年9月8日閲覧）〕によると、「学費」の項に、「生徒には在学中手当及び現食を給し寄宿舎に収容す」「又在学中所要の被服を貸与又は給与す」とある。「服務義務」としては、「卒業後十二ヶ年間救護看護婦として戦時、事変又は平時救護其他演習、講習、点呼の際何時にても召集に応ずるの義務を負ふ」ことが示されている。
- 73) 新潟県内の「看護婦」「産婆」の養成機関について、新潟大学医学部五十周年記念会編『新潟大学医学部五十年史』〔新潟大学医学部五十周年記念会、昭和37年、691頁（<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/9544144/1/357>：令和5年10月21日閲覧）〕に次のような記述があつた。
- 現在、新潟大学医学部附属看護学校の沿革を遡ると、まず明治四三年九月に新潟医学専門学校看護婦養成科設置の議がおこり、一〇月に看護婦養成科規則が定められ養成科講習生の募集が行なわれた。即ち、一六歳以上三〇歳未満の独身女性で高等小学校卒業程度の学力を有する者が試験の上、選ばれ、給費生として待遇し、三ヵ年の修業後は一ヵ年間附属病院での勤務を義務づけられていた。（中略）未だ婦人職業の数少なく且つ社会に認められていながつた当時、国立の医学専門学校に附属した看護婦養成所がこの地方で開かれたことは画期的なことであつた。当時、看護婦の教育といえば、新潟では新潟産婆学校、柏崎の宮川産婆学校、郡立高田病院産婆看護婦養成所があり、産婆教育と並行して看護学の教習が行なわれていたが、大半は独学か開業医師の下での研修で、免許取得には地方長官の指定した検定試験に合格することによつて看護婦の仕事がなされていた時代に、新しく一つの組織化された看護婦教育が始められたのは画期的なことであつた。
- 74) 『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、77頁。

- 75) 彼女について、新聞報道では「大の勉強家」であると、以下のように取り上げられている。
- 本年の卒業も間近になり女高師でも生徒の売込に忙しいがこの本年卒業生のうちに初めて本科を出る一鮮人生徒がある
- 従来も選科や聴講生には三四人づゝ鮮人がないではないが、本科は何しろ全国高女や師範からの才媛が競争で入学するので、今までは一人もなかつた、本年卒業する（中略）さんは服装から言葉まで内地婦人と変つたところがなく、大の勉強家で当局も将来をしよく望してゐる、女高師阿部教授は『(中略)さんは京城生れで京城(判読不能、「淑」か一筆者註)明女子高等普通女学校卒業後新潟県柏崎高女に入り同高女から本校に來た生徒で非常に
- 明晰な頭の持主で家庭は士族に類するが学資は淑明の母校から來てゐたと記憶してゐる』と（後略）（『読売新聞』、大正14年1月22日、7面）
- 76) 『同窓会々報』第10号、昭和5年12月、70頁。刈羽郡内の小学校名については、文明堂編集部編『改正市町村便覧』立川文明堂、大正14年、33-34頁参照（<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/2209672/1/191>：令和5年11月19日閲覧）。
- 77) 『同窓会々報』第10号、昭和5年12月、71頁。
- 78) 同卒業生について、昭和7年の『名簿』では、「柏崎町枇杷島小学校」（柏崎高等女学校同窓会編『昭和七年 同窓会員名簿』、昭和7年11月、巻末名簿22頁）と記載されている。
- 79) 『創立40周年記念号』、昭和18年12月、41頁。
- 80) 『新潟県教育百年史 昭和前期編』、1046頁参照。
- 81) 『創立40周年記念号』、昭和18年12月、63頁。
- 82) 『同窓会々報』第10号、昭和5年12月、65頁。
- 83) 中等教科書協会編『昭和五年五月現在 第七十二版 中等諸学校職員録』〔中等教科書協会、昭和5年、732頁（<https://dl.ndl.go.jp/pid/1448223/1/450>：令和5年11月19日閲覧）〕によると、尚綱女学校の「体」の教員として同姓同名の人物がみられた。なお、「尚綱女学校」は昭和18年、中等学校令に基づく「仙台尚綱高等女学校」となった（『官報』第4876号、昭和18年4月16日、468頁参照）。
- 84) 『同窓会々報』第15号、昭和12年12月、49頁。
- 85) 新潟県立柏崎高等女学校同窓会編『昭和十六年度同窓会員名簿』新潟県立柏崎高等女学校同窓会、昭和16年12月、21頁。
- 86) 神戸女学院大学ホームページ「神戸女学院の歴史」によると、明治42年に専門学校令にもとづく専門部が設置された（<https://www.kobe-c.ac.jp/about/outline/history>：令和5年9月8日閲覧）。その後、「神戸女学院専門学校」と改称された（『官報』第3214号、昭和12年9月17日、472頁参照）。なお、『官報』によれば、「師範学校、中学校、高等女学校教員免許状授与」中「体操科ノ内体操」に同姓同名の記載があった（『官報』第1646号、昭和7年6月27日、707頁）。註83に示したように、尚綱女学校の「体」の教員としても記載が認められ、さらに、東京女子大学五十年史編纂委員会編『東京女子大学五十年史』（東京女子大学、昭和43年、177頁、<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3447115/1/98>）にも同姓同名の「助教授」の名前がある。
- 87) 『同窓会々報』第10号、昭和5年12月、65頁。
- 88) 『同窓会々報』第18号、昭和15年12月、25頁。
- 89) 『同窓会々報 記念号』、大正13年11月、82頁。
- 90) 『同窓会々報』第12号、昭和9年12月、24頁。
- 91) 杉浦守邦『養護教員の歴史』東山書房、昭和49年、76-77頁参照（<https://dl.ndl.go.jp/pid/12057774/1/46>：令和6年9月14日閲覧）。同書には、昭和9年度に「学校看護婦」の学歴調

査が行われたとある。「外地を除く 2,884 名中、高女卒は 773 名で、高小卒 1,954 名、尋小卒 133 名、その他 24 名」とあり、「当時の一般女子の学歴からみれば高い方にはいる」と評している。また、「特に高女卒の多い」府県として、「東京の 136 名、福岡の 109 名、沖縄 69 名、大阪 62 名、北海道の 44 名、熊本 29 名、新潟 26 名等」（同書、77 頁）が挙げられている。

- 92) 『同窓会々報 記念号』、大正 13 年 11 月、75 頁。
- 93) 『同窓会々報』第 10 号、昭和 5 年 12 月、68 頁。
- 94) 『同窓会々報』第 10 号、昭和 5 年 12 月、64 頁。
- 95) 『同窓会々報』第 18 号、昭和 15 年 12 月、25 頁。
- 96) 『創立 40 周年記念号』、昭和 18 年 12 月、41 頁。
- 97) 『同窓会々報』第 10 号、昭和 5 年 12 月、70 頁。
- 98) 『同窓会々報』第 12 号、昭和 9 年 12 月、24 頁。
- 99) 『創立 40 周年記念号』、昭和 18 年 12 月、41 頁。
- 100) 『同窓会々報』第 10 号、昭和 5 年 12 月、68 頁。
- 101) 『同窓会々報』第 12 号、昭和 9 年 12 月、24 頁。
- 102) 『同窓会々報』第 10 号、昭和 5 年 12 月、67 頁。
- 103) 『同窓会々報 記念号』、大正 13 年 11 月、75 頁。
- 104) 拙稿「各種学校におけるタイピスト養成について—大正・昭和戦前期を中心に—」名古屋産業大学職業教育研究センター編『職業教育学の探求』第 2 号、2024 年、40 頁参照。
- 105) 『同窓会々報』第 10 号、昭和 5 年 12 月、65 頁。
- 106) 『同窓会々報』第 10 号、昭和 5 年 12 月、69 頁。
- 107) 『同窓会々報』第 10 号、昭和 5 年 12 月、69 頁。
- 108) 『同窓会々報』第 13 号、昭和 10 年 12 月、巻末「会員名簿」20 頁。
- 109) 『同窓会々報』第 8 号、昭和 4 年 1 月、54 頁。
- 110) 『同窓会々報』第 12 号、昭和 9 年 12 月、25 頁。
- 111) 『同窓会々報』第 12 号、昭和 9 年 12 月、24 頁。
- 112) 『同窓会々報』第 12 号、昭和 9 年 12 月、24 頁。
- 113) 『同窓会々報』第 12 号、昭和 9 年 12 月、27 頁。
- 114) 前掲、『新興コンツェルン理研の研究』、254 頁参照。また、「理研コンツェルン各社一覧表（昭和十四年三月一日現在）」野村証券株式会社調査部編『昭和十四年三月 理研コンツェルン株式会社年鑑 一昭和十四年版一』野村証券調査部、昭和 14 年、折り込み（<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1074319/1/7>：令和 5 年 10 月 25 日閲覧）も参照した。
- 115) 『創立 40 周年記念号』、昭和 18 年 12 月、41 頁。「西川鉄工所」については、柏陽網機株式会社ホームページ「会社沿革」(<https://www.hakuyo21.co.jp/company/history/>：令和 6 年 9 月 14 日閲覧)を参照した。
- 116) 国際石油開発帝石株式会社編『国際石油開発帝石 10 年の歩み 融合・挑戦そして未来へ』国際石油開発帝石株式会社、2019 年、2 頁（<https://www.inpex.co.jp/company/pdf/history-10years.pdf>：令和 5 年 10 月 20 日閲覧）。
- 117) 長野県における高等女学校卒業者の進路については、拙稿「長野県長野高等女学校における卒業生の進路」（東海学園大学スポーツ健康科学部教育研究紀要委員会編『東海学園大学教育研究紀要』第 7 号、2022 年、28-42 頁）、同「長野県松本高等女学校における卒業生の進路」（同第 8 号、2023 年、14-26 頁）を参照。
- 118) 『六十周年記念誌』、8 頁。